街角昭和博物館と横丁のあるまちづくり

（背景）
人口減社会では駅前商店街や中心市街地商店街といえども寂しくなっていく傾向にあることは否定できない。大型店舗が郊外にできたりすればそれが加速される。そこで、せめて繁盛した昔を偲ばせ時代を懐かしみながら人が集められる工夫が必要な時期にきていると思う。

（内容、効果）
（１）おもちゃ、ぬいぐるみのほか、当時流行ったラベルの商品など、各家庭に昭和の香りのするなつかしい物品が眠っていることは多い。印象的に福岡の直方、熊本の人吉、宮崎の都城などではどうであろうか。それらを持ち寄り商店街の各店のショウウィンドウなどのひと隅に飾るのである。人はそれらを眺めながらショッピングを楽しむ。
これだけで立派な街角昭和博物館になるが、地域に声をかければ実際にはあふれるばかりに多くの懐かしい物品が集まるはずである。そうした場合にはシャッター商店を活用し、あるいは商店街の力でスペースを確保し、そこを展示場にして閲覧可能にするのである。
（２）街角昭和博物館のある商店街ではもうひと工夫して欲しいことが実はある。そこで横道ごとにその両側にたくさんの植木鉢が置かれ縁台のある、夏には子供や老人が集まり線香花火や打ち水が行なわれる横丁をつくって欲しいのである。
買い物に来た人もそれらを眺めて楽しめるなど大きな絆づくりにつながる。そこでは道端商店として、ご近所産の採れたて野菜即売などが臨時的に行なわれるなどしてもよい。
加えてここまでやれれば、立派なまちづくりとして認められ、他所から観光客などを集められると考える。